



Shibuya Culture Project

1996 年のロンドンとピチカート・ファイヴ

原 知章

私は、1996 年に久しぶりにロンドンを訪れた。私事になるが、私は中学 2 年生の頃（1984 年度）に約 1 年間ロンドンに滞在していたことがあり——別のコラムで述べるつもりだが、そのときにスタイル・カウンスル、EBTG、シャーデーなどのアーティストと出会うことになった——ロンドンを訪れるのはその後初めてのことだった¹。面白いことに、1984 年のロンドンの記憶は色々な場面が鮮明によみがえってくることがあるが、1996 年のロンドンの記憶はかなり曖昧である。

ただひとつ、今でも鮮明に思い出すことがある。それはロンドンの（たしかオックスフォードストリートあたりの）素敵な雰囲気のアパレル・ショップに入ったときのことである。なんと、店内にピチカート・ファイヴの曲が流れていたのである。もちろん日本語の曲である（残念ながら、どの曲だったかは思い出せません²）。

¹ 今思うと、大学生の頃にロンドンに行っておけばよかった……当時の私は——60～70 年代カルチャーの遺産かもしれないが——「大学生になって自由な時間ができたから、インドに行くべきでしょ！」と友だちと盛り上がり、インド（ついでにタイ）に行ったり（インドの映画館で衝撃を受けた。また、暑さに耐えきれず氷入りのさとうきびジュースを飲んで大変な目にあったり、帰国時に成田空港でいろいろ問い詰められたりした）、当時はまっていたアイスホッケーの本場であるカナダやアメリカに行ったりしていた（カナダでは、「自分は東京大好きです」というカナダ人男性と仲良くなり、一緒にバンクーバー観光をして、その後危うい目にあいそうになった）。大学生のみなさん、学生としてのかけがえのない時間を大切にしてください！

² ピチカート・ファイヴは、1994 年にアメリカのマタドール・レコードからミニ・アルバム『5×5』とアルバム『Made in USA』をリリースしていた。私がロンドンで耳にしたのは、『Made in USA』に収録されていた曲であった可能性が高い。

日本では、1993 年頃から「渋谷系」という語がメディアに登場するようになり、その後広く普及し、いわゆる「渋谷系」のアーティストが一種のブームになった。これは個人的な印象になるが、1996 年頃には、「渋谷系」ブームはすでに落ち着きを見せつつあったように思う (cf. 朝岡 2018; 加藤 2020)。そうした時期に訪れたロンドンのアパレル・ショップで、当たり前のように——店員も客も驚いた様子など見せることもなく——ピチカート・ファイヴの曲が流れていたことに、店内でいちばん驚いていたのはたぶん私であった。

そのときの私はまだ、「渋谷系」の音楽が海外でどのように受容されつつあったのかということについて——「Shibuya-kei」という語が海外でも用いられつつあったことも含めて——ほぼ無知であった (cf. McKnight 2009; Mōri 2009; Reynolds 2011)。

つづく

参考文献

- 朝岡孝平, 2018, 「市場カテゴリーのダイナミクス——渋谷系音楽を事例として」一橋大学大学院商学研究科博士論文。
- 加藤賢, 2020, 「渋谷に召還される〈渋谷系〉——ポピュラー音楽におけるローカリティの構築と変容」『ポピュラー音楽研究』24: 17-34.
- McKnight, A., 2009, “Shibuya-Kei,” Buckley, S. ed., *The Encyclopedia of Contemporary Japanese Culture*, Routledge, 451.
- Mōri, Y., 2009, “Reconsidering Cultural Hybridities,” Berry, C., Liscutin, N. and Mackintosh, J. D. eds. *Cultural Studies and Cultural Industries in Northeast Asia: What a Difference a Region Makes*, Hong Kong University Press, 213-230.
- Reynolds, S., 2011, *Retromania: Pop Culture’s Addiction to Its Own Past*, Faber & Faber.
- ※日本語文献を追記予定